

教員にとっての読書の意味と実際

—小学校教員へのインタビュー調査を通して—

第1章．研究の背景と目的

第2章．事例研究

- 1 方法
- 2 聞き取り調査（A～H）
- 3 教員にとっての読書の意味

第3章 「学び続ける教師」であることと
「読書」との関わり

京都教育大学大学院 連合教職実践研究科
教職実践専攻 学校経営力高度化コース
166053 梶山 直美

第1章 研究の背景と目的

子どもの本離れ、読書離れが指摘され深刻な問題として取り上げられるようになったことに対して、2000年の子ども読書年以來、「子どもの読書活動の推進に関する法律」(2001)では、各都道府県における子どもの読書推進活動協議会の設置や推進実施のための政策策定、「文字・活字文化振興法」(2005)では、それを支える文字・活字推進機構の設置など、各地域で子どもたちへの読書推進は広がってきた。学校でも「朝の読書」の様々な形での取組が全国的に広まりを見せ、その結果、各学校段階において不読者の割合が減少傾向に転じた。全国学校図書館協議会の学校読書調査(2012)によると、1か月間に1冊も本を読まなかった「不読者」の割合(不読率)は、小学生4.5%、中学生16.4%、高校生53.2%と、学校段階が進むにつれ読書離れが進む傾向にある。16歳以上の男女を対象に文化庁が実施した「国語に関する世論調査」(2014)によれば、1カ月に3冊以上の本を読むと回答した割合は17.9%であるのに対し、「読まない」との回答が最も多く、47.5%に上った。また「読書量は減っている」と考える人も65.1%に上った。2009年実施の前回調査に比べ、1冊も読まない割合は1.4ポイント増加、2002年実施の前々回調査からは10ポイント近く増加しており、日本人の読書離れが浮き彫りになっているといえる。他方で、成人を対象にして毎年行われている毎日新聞社による読書世論調査においては、本を「読む」と答えた人の割合は多少の変動はあるものの、戦後から変わらずおおむね5割前後で大きく変動はしていないという。インターネットを「する」人は、年々増加しているという。

本を読むということについての意義や価値については、多くの者によって語られてきた。「教育改革国民会議報告」(2000)の中では、「人間性をより豊かにするために、読み、書き、話すなど言葉の教育を大切にする」と提言されている。また、「子どもの読書活動の推進に関する法律」(2001)では、「読書活動は、子どもが、言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身につけていく上で欠くことのできないもの」と記されている。文化審議会国語分科会読書活動等小委員会の報告(1999)によれば、「読書により我々は、楽しく、知識が付き、ものを考えることができる。」「すべての活動の基盤である「教養・価値観・感性」などを生涯を通じて身に付けていくために不可欠」としている。

このように、読書の重要性や意義については、一般的に十分に認識されているものと考えられる。ましてや、学校での読書推進を担う教職員が、その価値を否定することはおそろくないと思われる。だが、「学校教師の読書実態と読書意識に関する研究」(2010、

pp.133-134) で中島は、「子どもの本ばなれ、読書ばなれが指摘されているが、教師の本ばなれ、読書ばなれはそれ以上に深刻である」と述べている。また、教師の読書意識から、「観念的には価値を認めるが、自分の読書への取組という観点からは消極的な姿勢が見られ」「本音と建て前とが伺える」というのである。

林 (2015、pp.25-26) は、「2011 年に小笠原喜康日本大学教授らが行った教員向けアンケート調査によれば、教育関連の本を年間 20 冊以上読む教員の割合は、勤務年数 2～10 年 9.9%、11～20 年 15.7%、21～30 年 22.8%、31～40 年 35.1%で合計 23.0%となっている。自分の仕事に関連する本を月に 2 冊すら読まない人間が約 8 割もいるということだ。批判を恐れずに言えば、その 8 割の教員は今すぐ教員免許を破り捨てるべきである。なぜなら、我々教育者は学び続けることを課せられた職業人だからである。」と本を読まない教員を痛烈に批判している。佐藤 (2009、pp.72) は、教員が専門家として成長するためという趣旨で書かれた書籍の中で「西洋東洋を問わず、古来、教えるという不遜な仕事を教師が行うことができたのは教師自身が他の誰よりも読書をし、学んでいたからである。よく学ぶ者のみが教壇に立つことが許された。」と、教員にとっての読書について書いている。

中央教育審議会答申「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」(2012) では、「教職生活全体を通じて、実践的指導力等を高めるとともに、社会の急速な進展の中で、知識・技能の絶えざる刷新が必要であることから、教員が探究力を持ち、学び続ける存在であることが不可欠である」とし、「学び続ける教員像」の確立を求めている。そして、これからの教員に求められる資質能力を「①教職に対する責任感、探究力、教職生活全体を通じて自主的に学び続ける力②専門職としての高度な知識・技能③総合的な人間力」、として整理している。

変わり続ける社会に対応しよりよく生きる子どもを育てるために、教員は学び続け、バランスよくその力量を向上させていかなければならない。「学び続ける教師」であるためには様々な手段が考えられるが、教員にとっての読書の意味、実際はどのようなものか。読書の果たす役割はどう認識されているのか。本研究では、小学校教員へのインタビュー調査をもとに、読書への意識や実際がどのような傾向にあるのかを明らかにし、「学び続ける教員」であることと、読書との関わりについて考察したい。

第 2 章 事例研究

1 方法

上記の課題のもと、現在小学校に勤務している性別や年代に重なりが少ない8名の教員にインタビュー調査を行った。インタビューの項目は、①本をどのくらい読んでいるか②どのような本を読んでいるか③読書にはどんな意味があると思うか④読書によって影響を受けたこと⑤よく読む人とそうでない人の違いを感じるかの5項目は必須項目とし、それに関わる内容については自由に語ってもらうこととした。インタビューした内容を文字に起こし、意味のかたまりごとに切片化してラベルを付けた。そして、共通のラベルごとにカテゴリーを作って関連図に整理し、各教員の読書活動の実際や読書についての意識を顕在化するという形で分析を行った。

2 聞き取り調査 (A～H)

(1) A (20代男性)

Aの特徴は、読書の大切さは感じているものの自分は読まないということである。担任している子どもの様子を振り返ったり、読書を良くする他者との関わりが深かったりしたことから、読書は大切であると思っている。自身は読書に対して苦手意識があり、もっと読んでおけば

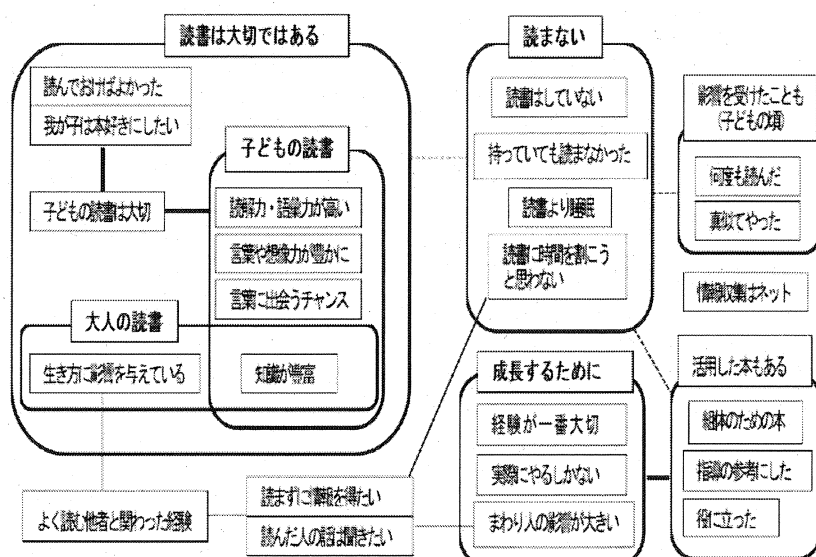


図1 Aの読書の実際と意識

よかった、我が子は本好きにしたいと考えていて、後悔している。だが、現状としては、読書に時間を割こうと思わず、読書よりも睡眠と断言するほど読んでいない。教師の成長に関わっては、実際に経験をするのが一番で、本よりも周りの人からの影響が大きいと語る。本を読んだ人の話は聞きたい、読まずに情報を得たいとも感じていることから、自分で読書をする代わりに、周りの人から活用できるものを手に入れることができる環境に身を置いているということもできる。

(2) B (20代男性)

Bの特徴は、教室ですぐに使えるスキルや情報を得るための読書が全てということであ

る。講師として教壇に上がって3年目のBは、指導技術の向上の必要性から、仕事への活用が最優先だ。仕事に関わる以外の本は、マンガも読まない。授業研に向けて、算数の教科研究の本を手にとったり、担当する学年に焦点を当てた本を

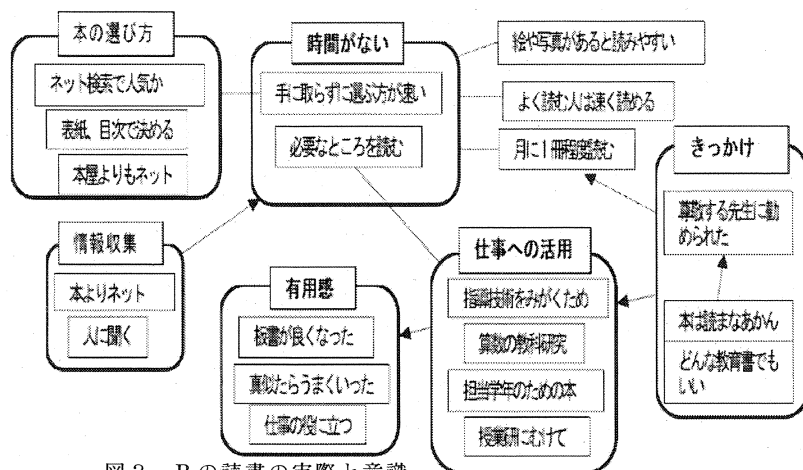


図2 Bの読書の実際と意識

読んだり、自身の切実性に基づいて本を選ぶ。尊敬している先生に本を読むことを勧められたことをきっかけに、本を読むようになった。本を読んで得たことを実際に教室でやってみることを通して、前より板書が良くなったと感じる等、仕事の役に立っていると感じている。ただ、「時間がない」状態で、本の選び方も情報収集も、本の内容も、時間がわからない効率的な方法を好んでいる。

(3) C (20代女性)

Cの特徴は、読書指導を重要なものと位置付け、子どもへの関わりや環境づくりに励んでいるが、自身のための読書はできないとジレンマを感じていることである。読書ができる子どもにしたいという気持ちが強く、そのため、教室の中に、学習に関連する本や子どもが興味を持ちそうな本を自身で購入し揃えて置いている。教室に本を置き環境を整えたり、読み聞かせをしたりする中で本を読む子が増えてきたことを喜んでいて、自身の子どものころの読み聞かせ体験や読書体験の少なかった

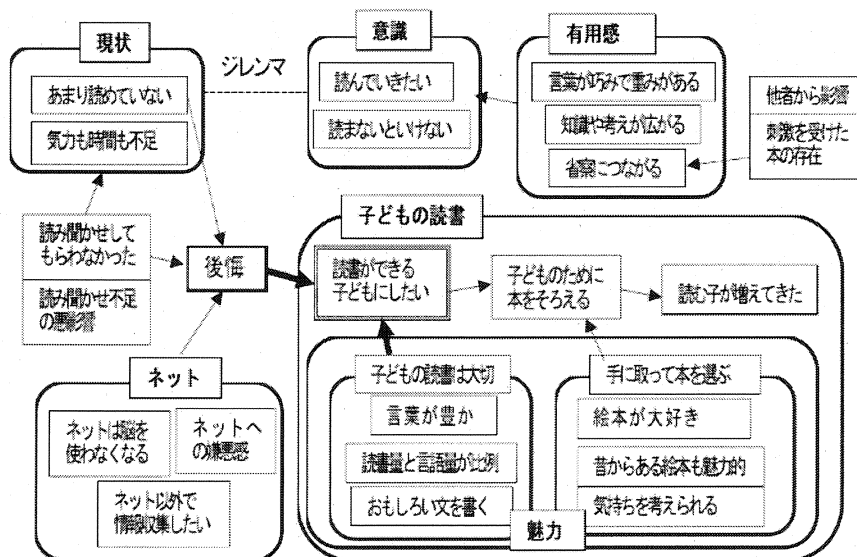


図3 Cの読書の実際と意識

ている。教室に本を置き環境を整えたり、読み聞かせをしたりする中で本を読む子が増えてきたことを喜んでいて、自身の子どものころの読み聞かせ体験や読書体験の少なかった

ことが、自身の読む力のなさにつながっていると感じており、関わっている子どもは読書ができるようになってほしいという願いが強い。自身の現在の読書については、気力も時間も不足していて読めていないが、読んでいきたい、読んだ方がいいという意識とのジレンマの状態にある。初任者のころの実践を振り返るきっかけになり次年度の実践に影響のあった本との出会いや、よく読む他者の姿などから、読書をするものの有用性は感じている。ネットを多用していた為に物忘れがおこるようになったと感じており、ネットの使用は極力控え、辞書や本を使っの情報収集を心がけようとしていることも特徴である。

(4) D(30代女性)

Dの特徴は、少し前までたくさん読書をしており、読書によって得られる良さを十分に感じているが、現在は読んでいないことである。

勤務2年目の時に学年を組んだ同い年の先生に強く影響を受け、憧れと悔しさ、負けたくない気持ち

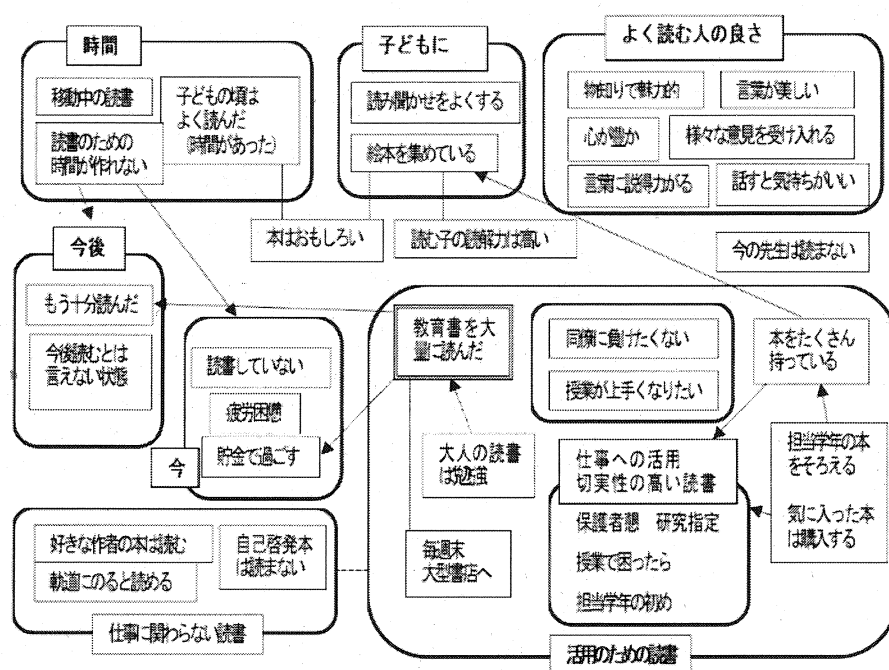
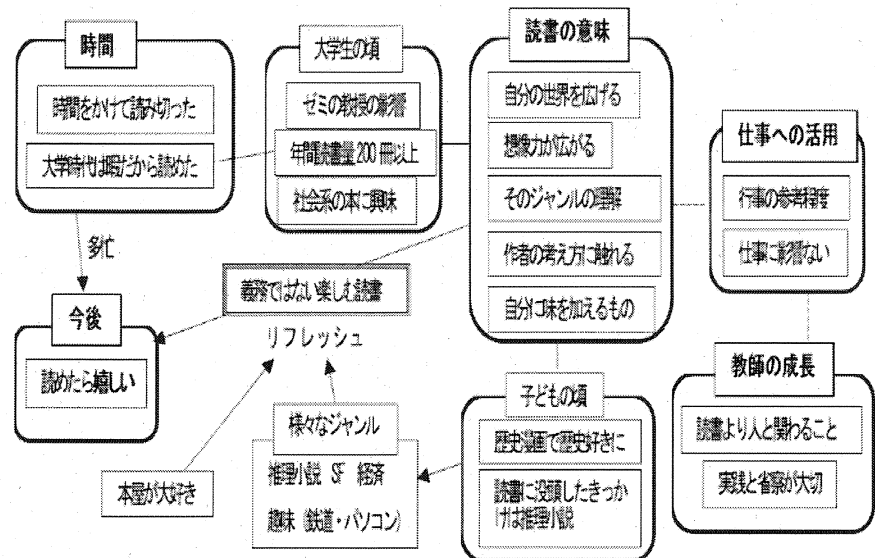


図4 Dの読書の実際と意識

で、毎週末大型書店に出かけ、大量に教育書を読んだ。本を読み準備をすれば効果が出て、それがおもしろくなって更に本を読みたくなった。経験年数10年を迎える現在、授業力の高さには周囲からの定評があり、研究主任も務めている。子どもへの読み聞かせにも積極的で、教育書だけでなく絵本も集めており、時期や場合に合わせた読み聞かせに取り組む。その同僚の影響か、よく読む人の良さを多く語っていた。だが、そのころにたくさん読んでもう十分、経験した学年の本はひと揃えしてあるということもあって、現在は読んでいない。多忙で時間が作れず、疲労困憊で週末はのんびり過ごしているという。子どもの読書は空想や疑似体験を「楽しむ」読書だが、大人の読書は「勉強」であると感じていることもわかる。

(5) E (30 代男性)

E の特徴は、読書を「楽しむ」ためのものと意識している部分が多いところである。仕事のために活用する切実性や責任からの読書ではなく、自分の世界を広げることが主な目的になっている。義務ではなく楽しむ読書であるので、「読まなければならない」ものではなく、「読めたら嬉しい」と位置付けられる。趣味の本を読むときなどは、リフレッシュの効果が大きいという。子どもの頃から



様々なジャンルの本に触れてきた。特に、大学生の頃は時間もあり、たくさん本を読んだそうだが、普段の業務に加え、家族が増えて家族の一員としての役割も増えていることから、現在は、長期休業中に1、2冊読む程度である。教師としての成長については、読書ではなく人と関わることや、実践や省察が大切だと語り、読書から得るものは教師の成長にかかわっているという意識はない。

(6) F (40 代女性)

F の特徴は、子どもの頃から現在まで日常的に読書をし、その良さを深く実感していることである。教育書をよく読み仕事に活かしているが、それ以外の本も読んでいます。年間60冊程度は読んでいたというが、あまり多く読んでいないと意識している。幼少期から、本がたくさんある家に育ち、読書好きだったことや、高校の国語教師の夫も二人の娘も読書が好きで、本が大量にある家で暮らしていることもあり、様々なジャンルの本を読んでいる。若い頃に出会った授業が上手い同僚の影響を受け、本がよい授業の原動力になっているのではないかと考えており、いい本に出会うにはたくさん本を読まなければならないと思っている。ネットと比較する中で、本は著者の誠心誠意が見られるなどと語り、本に信頼を寄せていることがよくわかる。また、よく読む他者の様子や、これまでの読書体験

から、読書の良さを多く実感している。また、読書を成長の一つのツールと捉え、活用している。テレビが好きではないにもかかわらず、強制的にでも見なければならないと思っており、大切だと思えるものはできる限り取り入れたいという気持ちが見られる。

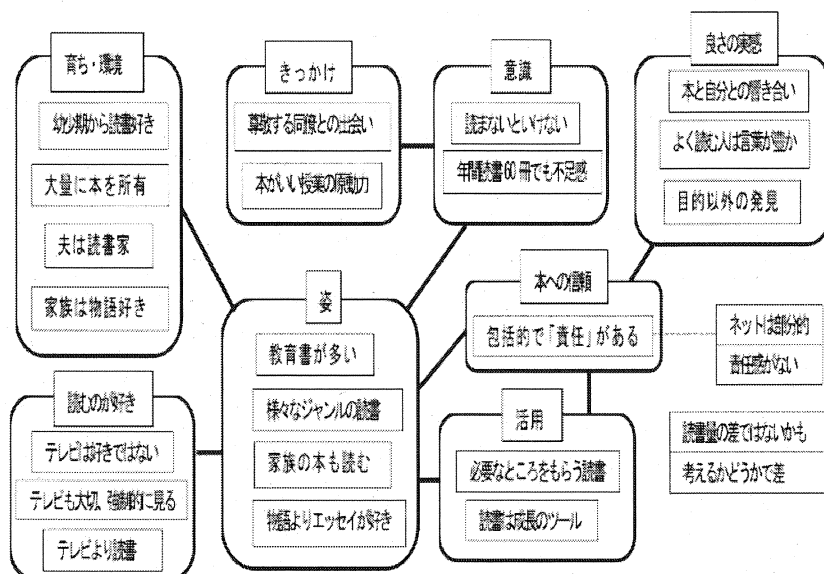


図6 Fの読書の実際と意識

(7) G (40代女性)

Gの特徴は、仕事に対する責任感のもとに読書をするべきという意識が強く、向上心を持って読書をし業務にあった活用をしているが、読めていないジレンマを感じていることである。通級指導の担当を長年経験していることもあって、特別支援関係の本をよく読んでいます。仕事から保護者との面談や、検査等の報告書を書くことが多く、読書で得たことを活用し、それらの業務をより良く行いたいという意識がある。仕事からみの読書は良くないと興味のある本も読むが、内容を楽しみ

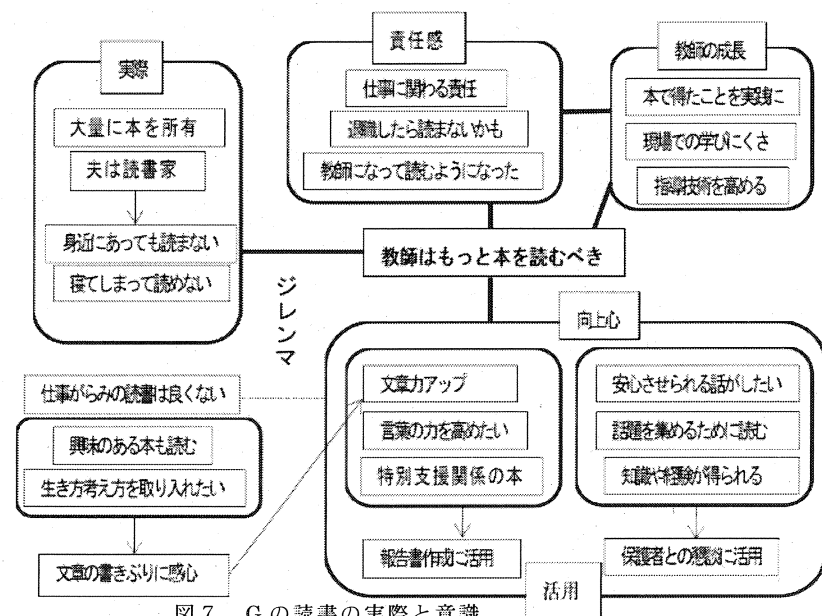


図7 Gの読書の実際と意識

つつも同じことを違う言葉で書き換える文章の書きぶりに感心しており、報告書の作成への活用につなげている。教師は自身の成長のためにもっと本を読むべきだと考えており、自分も含めて読書が不足していると感じている。

(8) H (50代男性)

H の特徴は、時期によって読書への関わり方が変容していることと、自分と向き合い認識を広め、活用しようとする意識が強いことである。幼少期、若い頃、今とで読書の様子が変

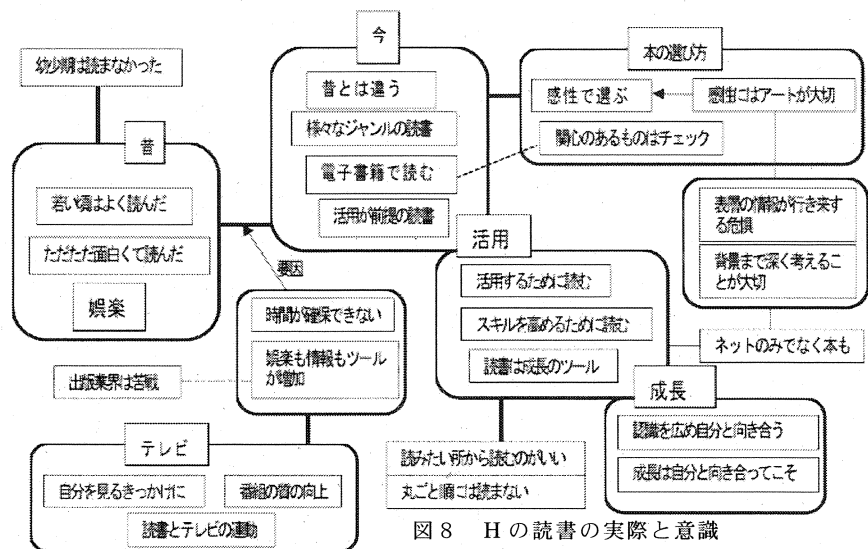


図8 Hの読書の実際と意識

容している。幼少期は、読まなかった。若い頃は、歴史小説や、興味のあった仏教学の本などを、ただただ面白くてたくさん読んだといい、娯楽の要素の強い読書だったと振り返る。現在は、活用するために読むということが目的に変わっている。その要因として、忙しくて時間が確保できなくなったことや、昔と違い娯楽や教養について、本にとってかわるものが増えていることを挙げている。その場合の本の読み方は、活用するために読むのであるから、読みたいところを読むのが良いと考え、活用するために読んだものであるから、何らかの影響を常に受けているという。また、認識を広めたり、自分と向き合ったりすることを読書の意義ととらえておりテレビ番組からも同じように影響を受けている。本は、自分の価値基準に反応するものを感性で選ぶ。感性を豊かにするには、文学作品や、音楽、美術に触れることも大切だといい、実際に出かけている。読書について話す中で、表層の情報だけが行き来していると社会の様子をとらえ、危惧している様子が見えた。

3 教員にとっての読書の意味

今回行われた聞き取り調査の分析から、教員にとっての読書の意味として以下のようなことが明らかになった。

第一は、教員としての仕事に活用するために読書をするということが多いということである。それぞれの教員が、経験や立場に合わせて、自身に必要な情報を取り入れ、目の前の直接的な業務に活用している。担任をしている者にとっては、子どもへの関わり、学級指導、授業スキル等、指導力量を高めるために本を読み、得た知見をもとに、実際に試してやってみるという形だ。Bのように、研究授業に向けて教材研究の本を読んだことを取

り入れたり、板書の仕方を向上させたくて本を読み、真似してやってみたら板書が良くなってきたと実感したりといったことである。Aのように、運動会での組立体操の演目を考える際に参考にするものとして、本の情報を活用することもある。普段本は読まないと言するAでさえ、組立体操のメイン指導の役割を任されると、必要性が高まり本を頼りにする。必要性が高まると、活用のために読書をするということである。また、Dのように、担当する学年についての発達的な特徴や指導のポイントがまとめたようなシリーズ本を買い揃え、担当学年の初めに必要な部分の確認をするという活用の仕方もある。本から情報を取り入れ、年度初めの懇談会などでの話題提供に使ったり、子どもへの指導に活かしたりするのである。Gは、通級指導を担当しているという立場から、特別支援教育に関係する本をよく読むと同時に、保護者懇談や報告書作成といった特有の業務に対しての向上心から読書を活用している。有名人で発達障害のある人の本を読むことで、子どもへの指導のヒントを見つけたり、保護者とイメージを共有しやすく将来的な話をする面談に役立てたりする。検査などの報告書を作成する際には、同じ物事を多様に表現する力が必要になり、読書によって出会った文章から良さを吸収しようともしている。だが、Dの言うように、切実性の高い活用のための読書は、無理にでも努力して励む、強いられて勉める「勉強」という位置づけになるのだろう。

第二は、楽しむことを目的に行う読書は少ないということである。読書によって、興味関心のある分野の知見を広げたり、様々なイマジネーションを膨らませたりする。実際には体験することのできないことでも、読書の世界に入り込めば疑似体験ができる。テレビや映画を娯楽として観ることと同様の意味を持つ。だが、今回の調査では、Eのように、仕事への活用はほとんどなく、リフレッシュすることを読書の目的とするような姿はあまり浮かんでこなかった。Hの大学生から若い頃のように、「ただただ面白くて」「信号待ちでも読みたい」といった、読書自体が娯楽、楽しみである読書の姿も同様である。楽しむ読書は、何かを得ようという責任感や切実性から「読まなければならない」読書ではなく、「読めたら嬉しい」という喜びの読書だ。教員にとって、こういった読書は、ずいぶん少ない傾向にあるだろう。

第三は、読書の意義や価値を認めていても、自身は読めない、読まない、ジレンマに陥っているということである。前述の中島（2010）の指摘通り、今回の調査でも、子どもにとっての読書の意義や価値は大きいということを感じながらも、実際としては、読んでいないという教員が少なからずいることが推測される。これまでの経験や、現在関わってい

る子どもの様子から、読書が良い効果を生んでいると感じている。よく読む子とそうでない子の比較をすることを通して、子どもの読書によって、読解力が向上する、語彙力が高まる、話す・書くなどの表現力が育成されることなど、その効果のほどが多くの教員から語られた。加えて、AやCのように、自身が子どもの時の読書体験の少なさを後悔し、「教え子や我が子には、本を読めるようになってほしい」という願いを持っていることから、子どもの頃の読書の意義を感じていることもわかる。しかし、自身の読書活動は行っていないとしても、Dのように子どもの状況や時期に合わせた読み聞かせを積極的に行ったり、Cのように教室に読ませたい本をそろえる環境整備をしたりなど、子どもの読書活動の充実に関与している姿が明らかになった。

第四は、読書によって自身の内面を耕すということである。それは、単に知識が豊富であったり、語彙が豊かで表現力があつたりといったことだけではない。Dは、よく読む人とそうでない人との比較を考える中で、本を読まない人は、自分の考えの中でしか生きていないから、視野が狭く、他者との違いを受け入れない傾向にあると言った。一方で、本をよく読む人は、たくさんの意見を本から知りうるチャンスがあり、自分と違う他者の意見を認めることができることから、物腰が柔らかく、話していて気持ちのいい存在だと語る。また、経験の大切さを認識しながらも、経験から学ぶことができる心の素地をつくることは読書によるものが大きく、「読書は知らない間にいろんなものを作っている」と、何かを得るためだけでない読書の良さを語った。自身の認識を深めることや、幅を広げることのできる読書によって、他者の意見や困難な体験を柔軟に受け入れられる内面をつくることにつながる。

第五は、目的以外の発見や本と自分との響き合いに読書の価値があるということだ。Fは、自分が求めようと思ってなかったところに、新たな発見があり、それがすごく大きいという。また、読書には、本の質や自分の置かれている状況によって生まれる響き合いがあつて、上手く響き合えた時に自分の根底が変わるようなことがありそれに感動するという。よく本を読んでいる教員は、そういった本と対話するような読み方をしている。

第六は、本には信頼を寄せられるということである。情報収集においては、インターネットを活用することが主流となってきた。Fは、「インターネットで調べると、最初から最後まで責任感がない」「一冊の本を出すことにその人の責任をもってこのことについて言うという誠心誠意が見える」といい、「間違いないものを子どもに与えられる感覚」を本に持ち、大きな信頼を寄せている。必要な情報だけを断片的に発信しているネットと

違い、本にはその情報の背景や経緯が全体的に含まれており、なぜそれがいいのか納得して受け入れることができるのだ。ネットは、誰でも情報発信できることもあって、情報の真偽を見極めにくい。新聞や雑誌、本は、「編集」「校閲」といった他者のチェックを受けるが、個人サイトにそれはない。「速さ」についてはネットの方が勝り便利ではあるが、書かれていることに対しての信頼度は本の方が高くなる。

第七は、自分のペースでじっくり思索できるということだ。F は、いろいろなつながりができると講演会などでの学びの良さも感じながら、「その人が内面で道筋を立ててこういう風に考えてきたっていうのを本なら落ち着いて読める」「その人が心を整えて書いたものを自分が心を整えた同じ状態で読めるっていうのは、すごく大きい」という。読書への関わりは、自らが本を手にとった時に生まれ、どんなペースで読もうとも、何度同じ部分をくりかえして読もうとも、途中で読むことをやめてしまうことでさえ、自由である。講演会や実際の人との対話の中で思考し学ぶ場面も当然のようにあるのだが、相手が目の前にいるからには、完全に自分のペースというわけにはいかない。じっくりとその物事や考えについて思索するようなことは、落ち着いた状態であることが必要なのである。単なる情報収集のみでなく、思考を深め自分自身と向き合うチャンスをもらえることが読書によってもたらされる大切な要素のひとつである。

以上のように、七つの意味を明らかにしたが、その中でも、第五以降については、読書によってしか得られない固有のものであると考えられる。

第3章 「学び続ける教師」であることと「読書」との関わり

「人間の総合的な成長は、優れた人間との対話を通じて育まれるが、身の回りに優れた人がいるとは限らない。しかし、本ならば現在生きていない人でも、優れた人との話を聞くことができる。優れた人との出会いが、向上心を刺激し、人間性を高める。」と斎藤(2002、p.59)は自己形成としての読書の良さを述べている。出会った本と対話するような読み方をすることで、自身の認識を意味付けし確認することができるとすれば、読書によっても「対話」している状態となる。そして、実在する人物との対話ではなく、読書による本との対話は自身のペースで能動的に自発的に行うことが可能であるから、より容易に手に入れやすい。自身の置かれた立場、経験、時期、課題、様々な要因によって、同じ本を読んでも受け取り方は異なり、そのような本との出会い、響き合いが教員の成長の契機となる。「学び続ける教師」であるためには、「読書」を単なる情報収集とするのみではなく、

本と対話する読み方を意識し、自身の認識をより豊かにすることが重要である。

また、学び続ける教師であるためには、自分自身の中に、課題や問いが存在しているかどうかということが大切になってくる。自身の課題があって初めて、学ぶ意味も意欲も増し、本を通しての自分との対話ができるのである。Hは「若者は本を読まないとかそういうことではなくて、活用したい何かがあるのかなっていうこと、自分と向き合っているのかということが問題」なのだと語る。自分の課題があり、そこから本を通して自分の考えの良し悪し、過不足などを考える。その本の知識を読み取ることだけではなくて、課題を持ち、自分自身と向き合うことなくしては、成長にはつながらないだろう。

読書によって、じっくりと思考を深め、自分と向き合うきっかけとして成長することができる。このことを実感している教員は、これまでも読書をしてきたし、これからもするのであろう。だが、このような自身を鍛えるような読書は、時間もかかり疲れもする。これまでの読書体験の少なさによって、その傾向は高まる。日常の業務に疲労困憊している教員が少なくない学校現場において、こういった鍛えるような読書は受け入れにくい。だが、時間をかけて自身を鍛えるような読書を避け、安直に効果に直結することを求めてしまうことによって、じっくりと物事を考えるという「学び続ける教師」にとって大切な力が失われている可能性がある。年齢構成のアンバランスによって教員の大量採用が行われ、人材の確保や育成が大きな課題となっており、学校現場では早く一人前になることが以前よりも強く求められている。効果に直結するようなハウツーを求め、表層に浮かぶ大量の情報に振り回されてしまう傾向はさらに加速するのかもしれない。もちろん情報収集のための読書も大切なのであるが、本と「対話」するような自身と向き合い、人間としての豊かさを深める、鍛える読書を行うことが、教育という不確実な営みに関わる教員としては、必要になるのではないだろうか。「対話」する読書ができる心の余裕を持てる働き方や環境に目を向けていくことも今後の課題だと考える。

引用文献

- 中島正明 2010「学校教師の読書実態と読書意識に関する研究」『安田女子大学紀要』38 pp,121-137
- 林純次 2015『残念な教員 学校教育の失敗学』光文社
- 佐藤学 2009『教師花伝書』小学館
- 斎藤孝 2002『読書力』岩波書店